南西ドイツ・農林業の村、ゲルスバッハの村おこし
～わが村は美しくーわが村には未来がある～

Unser Dorf soll schÖner Werden Unser Dorf hat Zukunft

北海道開発局　農業水産部農業振興課

北海道開発局では「わが村は美しくー北海道」運動※1を進めていますが、これはドイツで1961年から続けられている「わが村は美しくーわが村には未来がある」コンクール※2を手本としています。

2004年のコンクールでは、ゲルスバッハ村という小さな村が金賞を受賞しました。

このゲルスバッハ村のユーリン村長、農家のキーファー氏、林業の専門家のフーバー氏、ドイツ在住の科学ジャーナリスト池田憲昭氏の４氏が、札幌国際スキーマラソンに参加するために来札されることを機会に講師をお願いし、平成19年２月９日に「わが村は美しくー北海道」運動セミナーを開催しました。

本稿は、そのセミナー内容と池田氏のレポートをもとに、ゲルスバッハ村の村づくりについて紹介するものです。

授賞式・右端がユーリン村長

※１「わが村は美しくー北海道」運動：北海道の農山漁村とそれを支える農林水産業をより豊かにするために、2001年から北海道開発局で進めている運動。この運動の一環として、全道各地で地域活性化のために活動している優秀な団体を表彰するコンクールを隔年で実施している。

※２「わが村は美しくーわが村には未来がある」コンクール：1961年から当時の西ドイツ政府が始めたもので、当初は、第２次世界大戦後の混乱期の影響が残り荒れていたドイツの農村景観を美化しようというのが目的。現在は、サブタイトルの「わが村には未来がある」に示されるように、持続可能な村を作るための取り組みに評価の重点を置いている。

ゲルスバッハ村の位置

ゲルスバッハ村

ゲルスバッハ村は、ドイツ南西部のバーデン・ヴュルテンベルク州に属し、「黒い森」の南端、標高約900mの台地に位置する人口700人ほどの小さな村で、西はフランス、南はスイスの国境に近い位置にあります。

30年ほど前の大規模な市町村合併で、ゲルスバッハ村はショップハイム市に統合されました。

統合された後も機能は縮小されましたが村役場は市の出先機関として残されています。選挙で村長や議員も選出されますが、皆、他に仕事を持っており、

ゲルスバッハ村

公職はボランティアとして活動しています。

村の面積は約2,400haで３分の２が森林、残りは牧草地です。教会を中心とする集落の周りには緑豊かな牧草地が広がり、その外縁をモミとブナの混交林が囲み「太陽のテラス」と呼ばれるほど美しい眺めで、休日には近隣の都市や隣のフランス、スイスからも数多くの人がハイキングやサイクリングに訪れます。

村の主要産業は農林業ですが、農家のほとんどは兼業で、９割の村民は20～30km離れた村外に職場を持っています。以前は専業農家が多かったのですが、競争が激しくなったことから、兼業農家が増え、ジャガイモや穀物栽培から酪農へ移行しました。

また、農林業と結びつく観光業も村の重要な産業の一つです。

村の基本的な考えは、この農林業と観光業を維持し、絶やさないことによって、村の数少ないインフラである、ホテル、レストラン、商店などを維持し、村を守っていこうということです。

村おこしの始まり

村おこしのきっかけとなったのは、1980年代の後半に、生産者の労力が報われる価格で伝統牛※３の肉を販売することを目的とした「直売組合」を設立したことです。

この組合には農家だけではなく、観光業者や地方政治家も参加し、みんなで農業を守る姿勢を示しました。

組合は食肉を販売するだけではなく、農業を維持するための政治的ロビー活動や食肉について勉強する「肉セミナー」の開催など幅広い活動を行い、この事業が軌道に乗った結果、みんなでやればやれるという意識が芽生えました。

1993年に、組合の働きかけで村に新しい食肉処理場を建設しました。建設には州、自治体などの補助金を利用しましたが、建築、内装工事の大部分は村民有志がボランティアで行いました。

この新しい食肉処理場で処理することで、高い衛生基準を保つことができ、消費者価格も低く抑えたうえで、農家の収入も40％程度増加しました。

処理された肉は契約している業者に引き取られ、業者は「ゲルスバッハの新鮮な肉」「他では売っていない肉」というブランドを付けて地域のスーパーなどに卸しています。

村の小さなホテル

村の共有牧草地

村のチーズ工場

ドイツでは環境問題や食の安全性への関心が高まっていることもあって、こういうブランド肉には消費者も敏感になっており、高い評価を得ています。

また、村で生産される牛乳も村のチーズ工場で加工し直売されています。

1997年には13軒の酪農家が共同で農機具保管倉庫を建設しましたが、建設費用の約４分の１を州などの行政が補助し、残りを各農家が自己負担し、建設作業もほぼすべて農家が自らの手で行いました。

このように直売組合を契機としたいくつかの住民主体の共同事業で、「自分たちのことは自分たちでやろう」という共同体意識が村人の中に芽生えてきました。

その意識を一層強めたのが、1998年から２年間かけた村の多目的ホールの建設でした。これは既に30年以上前に提案されていたのですが、予算のめどが立たず滞っていた事業でした。

※３　伝統牛：ゲルスバッハ村で昔から飼われていた、高地での飼育に適した、肉量は少ないが肉質の良い短足牛。現在、ゲルスバッハ村では、独自にフランス産肉牛の種付け牛を所有し、この種付けにより肉量が多く、肉質の良い子牛の生産が進んでいる。

ホールの建設にあたっては、ゲルスバッハ産のもみ材を使用し、多くの住民がボランティアで働きました。住民が費やした時間は総計約3,700時間、金額換算で約72,000ユーロ（約１千万円）にもなります。また、スポーツクラブやコーラス団体などの村の市民協会※4はお祭りなどのイベントを開催して、その収益金約36,000ユーロ（約500万円）でホールのキッチン設備を作りました。

将来への危機感と発展目標

しかし、このほぼ同じ時期にショップハイム市の委託によって行われた農業に関する学術調査で、ゲルスバッハ村でこのまま何もしなければ、今ある40数件の農家は、このあと何十年かで途絶えてしまうという報告がされました。

また、2010年から、アニマルウェルフェアの理念に基づくＥＵの新しい農業管理基準※5も施行されることになりました。これは、農家にとって非常に厳しい管理基準で、小規模の兼業農家では、牛舎のリフォームに多額の費用を要するため、農業を続けることができなくなる可能性も出てきました。

ここで村長は、農業だけでなく、年々、観光客の宿泊数も減っている状況にあったことから、この観光客を維持し、増やしていくことによって村にあるホテル、レストラン、商店などを維持していかなくてはならないことにも気づきました。

このような問題認識から、ゲルスバッハ村では観光と景観、つまりは農業について検討するワーキンググループが作られました。

そこでのディスカッションを通じて、まず一つ、農業によって維持されている景観というのは、観光という点からも非常に重要な資源である。そしてもう一つ、村が生き残っていくためには、農業、林業、観光業が一緒になって努力する必要がある、という結論が出されました。

その二つの結論の中から、いくつかの発展目標もつくりました。

一つは、開けた牧草地としての景観を「農地」として維持して行かなくてはならない。そして、村の独自の景観を創出し、維持し、守っていくことが重要であること。また、農業についても、単に牧草地を管理するだけではなくて、農業生産をすることによって、ある程度の収入を得られるような仕組みづ

多目的ホールの建設

祭りの風景

築300年の牛舎・内部は数回リフォームしているが、外装は当時の状態を残している

※４　市民協会：法律で定められた税制上の優遇措置などを受けられる非営利・公益団体。日本でいうＮＰＯに近い組織。活動内容、規模は千差万別で、スポーツチームや地元の楽団、コーラスグループなどから、大きな環境団体までさまざまな団体が認可されている。

※５　アニマルウェルフェア（動物福祉）：単なる動物愛護だけではなく、動物の基本的権利を守ろうというもので、家畜についても生産性のみならず、生命の尊厳と倫理的な取り扱いを求めている。これに基づくＥＵの新しい農業管理基準では、家畜の管理状況を改善するために、牛が自由に歩き回れる牛舎の設置、改善を義務づけている。2010年から施行されるが、これにより従来の１頭、１頭を狭い柵で囲った牛舎は利用できなくなる。

くりを行わなければならないこと、などの目標が提出されました。

コンクールへの参加

こうした取り組みによって村おこしに関する意識も高揚してきたことなどから、村長は連邦政府主催の「わが村は美しく－わが村には未来がある」コンクールに参加することを村民に呼びかけ、村民会議を開いた結果、多くの賛同者が集まり、コンクールへの参加が決まりました。

約50人の村民有志が５つのグループに分かれてアイデアを出し合い、約30のプロジェクトにより村おこしをしました。

経済発展のために、小規模に分断されている農地を統合し、道路･排水路を整備することによって、効率的に農業ができるよう耕地整理事業を行いました。

人口700人のゲルスバッハ村には30もの市民団体、住民団体があります。社会性、文化的な生活の強化については、これらの団体が青少年活動とか婦人会活動を通じて文化的交流を行い、文化的にも豊かな村づくりにさらに貢献していくこととしました。

歴史的な建築物の保存と発展については、農家が空き家になっているという状況もあったことから、集会場などに活用することにしました。

緑の形成と発展については、婦人会や青年団、住民がボランティアで通りや広場、公共の建物の周囲を花や緑で飾る作業が行われました。花や植物は自治体が購入し、植栽と維持管理はボランティアに任されています。

村の景観については、ほとんどのドイツの村は中心部に教会があって、その周囲に集落が広がり、その周りに牧草地などの景観が広がっています。そのつなぎ目をきれいにして、村独自の景観を守り、また、その中にある貴重なビオトープ※6や自然保護地域、貴重な鳥の住んでいる地域などを守ることにしました。

この他に代表的なプロジェクトとして、観光のための「牛の学習小道」というプロジェクトを立ち上げました。観光客が美しい牧草地と森の中を歩くだけではなく、同時に牛のことを勉強することのでき

※6　ビオトープ：生物群集が存在できる環境条件を備える地域・場所。

村の小集落

花で彩られた公共施設周辺

村の教会とその周辺

牛の学習小道

るハイキングコースです。

村の中心から北に広がる牧草地を囲む約7kmのコースに「牛の祖先」、「牛の食生活」などのテーマごとに12の看板を立て、観光客は実際に農家が放牧している牛を眺めながら、楽しく牛について勉強できます。

このコンテストへの参加にあたっては、初期の段階から新聞記者やメディアなどを使い、活発な広報活動を行いましたが、これは賞を目指していく上でも、非常に大切なことでした。

また、これらのコンテストに向けた取り組みのほかに、村の４軒の兼業農家がＥＵの新しい管理基準にあわせた牛舎を共同で建設しました。これは村の持続的発展のために不可欠な農業の存続を目指し、農家経営をなんとか継続させていくための共同事業でした。

コンクールの効果

コンクールに参加し、金賞を受賞した効果はいろいろな面であらわれました。

農村婦人会が強力に活動したこともあり、村おこしに対する関心が非常に高まり、さまざまな活動をする住民が増え、村議会議員への立候補者も増えました。

また、国際グリーン市にドイツ政府からの推薦で出席するなどしてＥＵ全体に村の名前が広まり、観光客も増加しました。

ゲルスバッハ村の持続的発展

村の美しい景観を守る上で最も重要なことは、農業を持続するということ。農業が衰退すると、美しい牧草地にはすぐに木が生え、森になります。そうなると、観光業にとって重要な牧草地の開けた景観というものがなくなって、観光客も減り村が衰退してしまいます。

美しい景観を守るため、貴重な自然を守り、農業、林業とのバランスを取りながら、住民と一体となった取り組みが、持続的な村の発展につながるということです。北海道においても、各地域の振興に大いに参考になるのではないでしょうか。

ゲルスバッハ村の冬景色

牛の学習小道を回る観光客の一団

ゲルスバッハ村を眺めて

profile

ラルフ・ユーリン Ralf Ühlin

1965年 ゲルスバッハ村生まれ。警察官（本職）、'99年からゲルスバッハ村長（ボランティア職）。ゲルスバッハ村在住。

ロルフ・キーファー Rolf Kiefer

1957年シェーナウ生まれ。運送会社経営、副業で酪農と林業を営む。ゲルスバッハ村在住。

トーマス・フーバー Thomas Huber

1968年生まれ。大学で林業を学ぶ。コンピューター関連会社社員。フィリンゲン市在住。

池田 憲昭 いけだ のりあき

1972年長崎市生まれ。'97年岩手大学人文社会科学部卒業、2002年フライブルグ大学森林環境学部ディプローム課程修了。ドイツ在住科学ジャーナリスト。